

近世日本の唐話学と訳学

— 「訳社」を中心に —

袁 葉

一 はじめに

十八世紀初期の江戸で開催されていた「訳社」(正徳元年(一七一二)〜)は、近世日本における訳学と中国俗語文学研究でよく知られている近世中国語研究会である。訳社は、荻生徂徠(寛文六年(一六六六)〜享保十三年(一七二八))の護園学派の唐話(近世中国口語)研究会と思われ、護園学派の訳学と古文辞学の一環として、近世文芸研究史の中で取りあげられている。近世日本の訳学と俗語文学についての研究は、徂徠の『譯文筌蹄』(正徳四年(一七一四)〜正徳五年(一七一五))、特にその理論をなす「題言十則」を中心として述べられており、訳社について言及されているが、資料が少ないため、これまであまり重要視はされていなかった。本研究では、徂徠以外の主催者及び参加者に注目し、「訳社」が護園学派と緊密に関係していながら、その影響は護園学派に限られていない点を指摘することを試みる。

訳社については、一九四〇年に出版された石崎又造の『近世日本における支那俗語文学史』の中の一節が恐らく最も早い学術論考と思われる。近世俗語文学研究の先駆者の石崎は、訳学の周辺についても詳細な調査を行なっていた。しかし、石崎の研究は訳社の中国語教師の岡島冠山(延宝二年(一六七四)〜享保十三年(一七二八))と徂徠の護園を中心とする視点からの、訳社の教科書となる冠山の唐話著作の紹介と解説に留まっている¹⁾。

また、訳社の主催者については、徂徠の「訳社約」を引用し、徂徠、荻生北溪（延宝元年（一六七三）～宝暦四年（一七五四））と井伯明三人の名前を挙げただけで、北溪と井伯明についてはあまり詳細に論じていない。それゆえ、訳学と唐話学の研究では、北溪と井伯明、及び二人の唐話学と訳学についての詳しい点は、未だ明らかにならなかった。特に井伯明は、徂徠の「訳社約」に漢風の名前が一度挙げられただけで、訳社の主催者でありながらその経歴や人物像は説明が進んでおらず、「訳社」に言及している先行研究でも触れられないことの多い人物となっている。

井伯明とはいったい何者なのか。江戸時代の人名について記載した諸辞書には、（例えば、『改訂増補漢文学者総覧』や『近世人名録集成』など）漢風の名前が「井伯明」である該当人物が見当たらない。しかし、今ここで「井伯明」という人物の人物像を可能な限り、描くことはできないだろうか。これを目的として、本研究は井伯明の人物像を描くと共に、岡井黄陵（寛文六年（一六六六）？～享保三年（一七二一）？）という人物について述べたい。

二 岡井黄陵嵯州兄弟

岡井黄陵の著作の『訳通類略』には、その著者名の記載が「黄陵岡孝祖伯錫」となっていることから、黄陵の中
国風の名前は「岡伯錫」もしくは「井伯錫」となり、「井伯明」ではない。^③しかし、黄陵が井伯明と同じく護園学派の関係者であり不明な点が多い人物の一人であることから、黄陵を詳しく知ることにより井伯明のことを解明することができるとはならないか、という考えからこの人物についても考えてみたい。たとえ黄陵が井伯明ではなくても黄陵自身は訳社に参加したその経験により『譯通類畧』を書いたと思われることから、従来注目されてこなかった黄陵について調べることで訳社のことをより理解できるのではないかと考える。

黄陵は名を孝祖、字を伯錫といい、石崎の前掲の論著にて言及されている。石崎は「岡井黄陵は嵯州の弟で共に徂徠に学び、『譯通類畧』五卷を著はし」たことを述べている。⁽⁴⁾鳥居久靖は「日人編纂中国俗語辞書の若干について」(一九五七)において、石崎の説に従いながら、黄陵嵯州の字と没年を考えたところ、黄陵の方が兄ではあるまいかとの疑念を持っていた。⁽⁵⁾

確かに、『儒林源流』(一九三四)では嵯州が「孝祖之弟」となっている⁽⁶⁾ので、嵯州の方が弟であると考えられる。二人の生没年について確認してみると、『儒林源流』には、黄陵が享保三年(一七一八年)四月二十三日に亡くなり、享年五十三であったことが記載されている。⁽⁷⁾これによれば、黄陵は徂徠と同じ寛文六年生まれであったことになる。黄陵が享保三年に亡くなったことは、『江都諸名家墓所一覽』(文化十五年(一八一八))にも記載されている。⁽⁸⁾

しかし、一方で、別の内容を伝える資料もある。服部南郭(天和三年(一六八三)〜宝暦九年(一七五九))の『南郭先生文集』(享保十二年(一七二七)〜延享二年(一七四五))初編卷之五に「伯錫兄弟與韓客唱酬作此為喜」及び「同前贈仲錫」と題する詩がある。⁽⁹⁾これらの詩は岡井兄弟が朝鮮通信使と唱和したことを祝う内容となっている。この唱和は享保四年(一七一九)のこととなっており、⁽¹⁰⁾黄陵が享保三年に亡くなっている事実とは合致しない。また、黄陵の弟の嵯州が明和二年(一七六五)に亡くなったことは記載されているが、彼の生年についての記録は見つからない。『日本人名大辞典』によれば、嵯州は元禄十五年(一七〇二)生まれとなっているが、⁽¹¹⁾その情報源は明らかにされていない。もしこれが正しければ、黄陵は嵯州より三十六歳も年長ということになる。もちろん、兄弟間でその程度の年の差はありえないことではない。しかし、嵯州の『嵯州遺稿』(明和六年(一七六九)刊)には「奉賀家兄元服」と題する詩がある。⁽¹²⁾嵯州が三十六歳も年長の兄のために、元服を祝うのは不可能である。

さらに、『水戸文籍考』¹³には、嵯州が享保九年（一七二四）に彰考館に入り、享保十八年（一七三三）に讃岐藩に仕えたと記載されている。これによれば、享保十八年に讃岐藩に仕えた父もしくは兄が亡くなり、嵯州がそのポストを継ぐために讃岐藩に戻ったと思われるが、これについても現在確認できる家族の生没年とは合致しないので、再考察が必要だと考えられる。

三 岡井黄陵の『譯通類畧』

黄陵と岡井家についての謎はともかく、黄陵は訳社に参加し、その写本の『譯通類畧』は訳社での学びを基本として出来上がったものである。鳥居久靖の「日人編纂中国俗語辞書の若干について」は『譯通類畧』と冠山の『唐話纂要』（享保元年（一七一六）、享保三年（一七二八）版）の両資料に共に見られる語彙の訳し方を比較し、両資料の親近性を示し、『譯通類畧』が黄陵の訳社における講義のメモから生まれたと推測した。¹⁴

本研究が注目したいのは『訳通類畧』と徂徠の『訳文筌蹄』、特に両書の序文である。徂徠の『訳文筌蹄』には「題言十則」と題する序文があり、¹⁵それに対して黄陵の『訳通類畧』には「編意六則」という序文がある。¹⁶どちらもかなり長い文章であるため、ここに全文を引用することは控えるが、両文章を要約すると、「題言十則」は次の十点について述べている。①『譯文筌蹄』の成立の経緯と本書出版の目的。②訓読の問題と和華言語の異質性。③訳学と和華言語の可訳性。④訓読法と訳法の共通点と優劣。⑤講説の弊害と徂徠の学問の方法。⑥訳は根本ではなく「筌蹄」となる理由。⑦本書の四つの部類。⑧本編の語彙分類。⑨詩の語彙。⑩古文辞学。

「編意六則」は六つの項目からなる、現在見ることができる長沢規矩也の『唐話辞書類集』に影印されている写本（国会図書館本）は五項目しか確認できない。それは、以下の五項目である。①本書の目的。②俗語の学法と

『訳通類畧』の編成。③ 訳の方法。④ 訓読法と直読法の優劣。⑤ 文辞と道。

「編意六則」の五項目は徂徠の「題言十則」と対応している。第①項目の本書の目的は、訓読には問題があり俗語を学ぶべきだが、俗語も学ぶべき内容が膨大であり、『訳通類畧』はその俗語の学びの助けになると述べている。これは徂徠が第②点に指摘している訓読の問題と対応している。第②項目の俗語の学法と本書の編成は俗語の学習法に合わせて、『訳通類畧』が語彙と文章になる長い句からなる二編構成、と説明している内容となっている。それは徂徠の第⑤点と同じ学問の方法である。

「編意六則」の第③と第④は、「題言十則」の第③と第④を簡略化したものであり、最後の第⑤項目では「古文辞学」という語彙が使われてはいないが、俗語を習うことより中華書の古言と古聖人の教えを学ぶ助けになるという古文辞学の初歩的な概念を表している。すなわち、「題言十則」の最後の第⑩点と、それは類似している。

「編意六則」は所々「題言十則」の表現を採用しているが、「編意六則」は「題言十則」を逐語的に写すのではなく、同じ概念を自分の言葉で述べているように感じられる。例えば、「編意六則」の第⑤項目で、文辞と道を論じているところには、「題言十則」にない歴史言語学のような観点が現れている。特に、黄陵は言語が時代と共に変わって行く、今の言葉より古語を習うのが大変難しいことであるという点を指摘している。しかし、黄陵がこの観点を発展させず、日本の言葉に遡って中華の書物を読むほうがより難しいと述べ、古文辞学の観点に従っている。¹⁷⁾

以上の点から見ると、『訳通類畧』を作った黄陵は訳社と緊密な関係を持ち、訳社の講義と理論を熟知している人物ではないかと考えられる。しかし残念ながら現時点で、黄陵の人物像は不明のままである。訳社と井伯明との関係もはっきりしていない。これらを踏まえて今後は、岡井黄陵、嵯峨兄弟について調査しながら、徂徠が勤めた柳沢家、特に柳沢吉保の周辺人物に焦点を当て、井伯明について調査する予定である。

四 荻生北溪と明律研究

訳社の主催者は、徂徠と井伯明のほか、徂徠の弟の北溪がいた。北溪は第八代將軍徳川吉宗（貞享元年（一六八四）～寛延四年（一七五二）、征夷大將軍 享保元年（一七一六）～延享二年（一七四五））の儒臣で、吉宗の明律関心に大きく貢献した人物である。しかし、現在北溪の専門研究が少なく大庭脩の『荻生北溪集』以外にはほぼ先行研究がないという状況である。大庭の『荻生北溪集』も研究と資料の二部構成だが、概ね北溪の著作集である。また大庭が指摘したように、北溪の作は徂徠の成果だとの誤解もあった。これらを踏まえて、本稿では北溪の明律研究と訳社との関係を考察してみたい。

まず、護園門人が作った『護園雑話』に焦点を当てたい。『護園雑話』には、吉宗が律に関心が高く、北溪に官刻版を作らせたことを命じたという旨の記載がある。しかし、北溪は明律に関する知見に乏しかったので、徂徠に律について尋ねた、との記載がある。おそらく、北溪が律の専門家と見なされていたのは徂徠のおかげだ、ということを書いたのだろうと思われる。¹⁸

もちろん、北溪は律について徂徠に尋ね、徂徠の意見を受けた可能性が考えられる。そしてその結果、北溪は吉宗の信頼を受け、律についてかなりの論著も出した。大庭の資料編の目録を見れば、明律の訓点本の他、明律の訳本、明律と唐律の比較などがあることが分かる。幕府に勤めていた北溪の論著は政治に関する内容が多く、例えば、清と明との比較、清の女真族の始末などについての記述もあり、これらは恐らく吉宗の要望に応じて作られたと思われる。¹⁹

『護園雑話』には、北溪が書いた明律に関する条約が記載されている。この条約が主君に明律のことを聞かれた時守るべき規則であり、強調しているのは、律は意味が深くて理解しにくく、且つ人命に関わっているものなので、

慎んで扱わなければならないということである。条約の右には二十一人の参加者の名前がある。北溪とこの二十一人は、当時の政治の有力者に明律に関する知識を提供していたと思われる。つまり当時護園の周辺に、幕府と藩のために明律を研究していたグループがいたことが考えられ、この明律の研究グループは訳社と重なる。訳社の唐話教師の岡島冠山の『唐音雅俗語類』（享保十一年（一七二六）の第四巻の大部分と第五巻の全部は明律用語であるから、ここから訳社の明律研究の一端が見られる。²⁰

北溪の条約にはいつ書かれたかの記載がない。条約にある二十一人の参加者の名前も漢風になっており、どの人物を指すか不明なものがほとんどだ。しかし、二十一人の一番目の「服南郭」は服部南郭、二番目の「藤東野」は安藤東野（天和三年（一六八三）〜享保四年（一七一九））、三番目の平義質は三浦竹溪（元禄二年（一六八九）〜宝暦六年（一七五六））であると考えられる。要するに、この条約は東野が亡くなった享保四年以前に書かれたものであると思われる。これは訳社の開催期と重なっている。また、この三人とも護園門人でありながら、柳沢吉保（万治元年（一六五九）〜正徳四年（一七一四））の家臣でもあった。明律研究グループは唐話研究のために明律を扱っているのではなく、政治のために明律を研究していることがここからも見受けられる。

この明律研究グループもまた徂徠を中心とすると記載している資料もある。まず、服部南郭の『南郭先生文集』の最後に、徂徠の著作を紹介している。これによると、『明律國字解』は、徂徠が晩年に律の解説書として著したもののだが、律は仁徳に害があるので公にせず、家内に秘蔵していた。²¹さらに、奥村保之（生没年不明）という人が編集した『明律口伝』（宝暦二年（一七五二））がある。奥村保之は序文から察して、柳沢吉保の家臣である。この序文は、律は仁徳に害があるがやはり必要なのだ、と述べている。また、この『明律口伝』は三浦竹溪が口伝したものを編集した、と説明している。²²ここで注目したいのは、『明律口伝』の序文の次に「物子の訓戒」が記載されている

ることである。⁽²³⁾「物」は、周知の通り、荻生の本姓の物部を指している。この「物子の訓戒」は『護園雑話』にある北溪の条約とほぼ同じである。しかし、『明律口伝』ではこの訓戒が北溪ではなく、徂徠によるものとなっている。このように北溪と徂徠の作は重複しており、二つを関連させずに見る方がむしろ難しい。このように、荻生兄弟はお互い支えあって、十八世紀初期の政治と文芸の世界を歩んでいたことが分かる。もちろん、大儒者の徂徠は弟の北溪の著作を添削したり、北溪に自分の観点を伝えたりしたと思われるが、北溪の学術が全て徂徠の影響下にあったとも言えないだろう。護園門人が作った『護園雑話』も北溪に明律の知識がないと言いつつも、明律の条約については北溪が書いたものであり、この明律研究グループを実際には北溪が率いていたように記載している。徂徠の影響を除いて北溪を論じるのは難しいかもしれないが、考察の焦点が徂徠から北溪に移れば、そこで違うものを見られる可能性もあるのではないだろうか。

五 おわりに

本稿は徂徠の『訳文筌蹄』より、従来あまり注目されていなかった「訳社」を中心とし、近世の訳学と唐話学を考察する試みである。「訳社」の中では、徂徠という高名な人物の影になった主催者と参加者に焦点をあて、「訳社」が徂徠の護園の会とは言えない一面を描きたい。特に、主催者の一人でありながらその経歴や人物像は解明が進んでいない井伯明の可能性がある人物を特定するため、岡井黄陵という人物を紹介し、黄陵の稿本『訳通類畧』と、徂徠の『訳文筌蹄』及び「訳社」との関係を示した。また、徂徠の弟の荻生北溪が率いていた明律研究グループを通じて、徂徠の業績の影響と思われるがちな北溪の訳学と唐話学を考察した。本稿では結論より問題を多く提起したが、今後の研究では、現在の問題点を踏まえ、護園の訳学と唐話学と深い縁がある柳沢吉保と柳沢家の周辺人物に

ついで調査し、十八世紀の訳学と唐話学の研究を進める予定である。

【注】

- (1) 石崎又造『近世日本における支那俗語文学史』（弘文堂書房、一九四〇年）、九四―一六頁。
- (2) 荻生徂徠『訳社約』影印：『徂徠集』（ペリカン社、一九八五年）、一八六―一八七頁。
- (3) 岡井黄陵『訳通類略』（関西大学図書館 請求記号：I23*800*0656-0657）、一丁目表。影印版：長沢規矩也編『唐話辞書類集』（汲古書院、一九六九―一九七六年）、第一卷、七七頁。長沢が使った国会図書館本のほか、早稲田大学、東京大学にも写本があるため、今後はこちらの写本と比較し、『訳通類略』を調査する予定である。
- (4) 石崎又造、一一九頁。
- (5) 鳥居久靖『日人編纂中国俗語辞書の若干について』（天理大学学报）一九五七年、第八卷、第三号、一〇四頁。
- (6) 西島醇『儒林源流』（東洋図書刊行会、一九三四年）、一九四頁。
- (7) 同前、一九四頁。
- (8) 『江都諸名家墓所一覽』、四十五丁目裏。影印版：森銑三、中島理寿編『近世人名録集成』（勉誠社、一九七六―一九七八年）、第二卷、二八一頁。
- (9) 服部南郭『南郭先生文集』（国立国会図書館 請求記号：I586）、一一丁目裏―一二丁目表。
- (10) 澤井啓二『儒教共栄圏の幻影―十八世紀東アジアの（ジャポニスム）―』（『北東アジア研究』別冊第4号（二〇一八年九月）、一九八一―二〇二頁。
- (11) ジャパンナレッジにより引用。
- (12) 岡井謙州『藤州遺稿』（内閣文庫 請求記号：和2065）、卷一、一丁目表。
- (13) 清水正健『水戸文籍考』（須原屋書店、一九二二年）、七〇―七一頁。
- (14) 鳥居久靖、一〇四頁。
- (15) 荻生徂徠『訳文箋蹄』、影印『荻生徂徠全集』（みすず書房、一九七四年）、第二卷、三一一―三五頁。
- (16) 岡井黄陵『訳通類略』（関西大学図書館 請求記号：I23*800*0656-0657）影印：長沢規矩也編『唐話辞書類集』（汲古書院、一九六九―一九七六年）、第二卷、七七―八七頁。
- (17) 同前、八六―八七頁。
- (18) 『護園雑話』（写本、早稲田大学図書館 請求記号：イ17.02304）、六三丁目裏から六五丁目表まで。丁付けはない。この丁数は筆者が数えたものである。
- (19) 大庭脩『荻生北溪集』（関西大学東西学術研究所、一九九五年）、二一―三頁。
- (20) 岡島冠山『唐音雅俗語類』、影印：長沢規矩也編『唐話辞書類集』（汲古書院、一九六九―一九七六年）、第六卷、三〇一―三五四頁。

- (21) 服部南郭『南郭先生文集』、第四編、巻の六、六丁目裏から七丁目表まで。
 (22) 奥村保之編『三浦竹溪口伝』『明律口伝』(写本、早稲田図書館 請求記号 704.06258)。序文は一丁目表から四丁目表まで。丁付けはない。この丁数は筆者が数えたものである。
 (23) 同前、五丁目表から五丁目裏まで。

【参考文献】

- 石崎又造『近世日本における支那俗語文学史』(弘文堂書房、一九四〇年)
 大庭脩『荻生北溪集』(関西大学東西学術研究所、一九九五年)
 岡井黄陵『訳通類啓』(写本、関西大学図書館 請求記号：L23*800*6056-6057) 影印版：長沢規矩也編『唐話辞書類集』(汲古書院、一九六九～一九七六年)、第一巻、七七一～四八〇頁。
 岡井嶺州『嶺州遺稿』(明和六年(一七六九)、内閣文庫 請求記号：和20655)
 岡島冠山『唐話纂要』(享保元年(一七一六)、享保三年(一七一八)版)(早稲田大学図書館 請求記号：ホ05.01796)
 同『唐音雅俗語類』(享保十一年(一七二六)) 影印版：長沢規矩也編『唐話辞書類集』(汲古書院、一九六九～一九七六年)、第六巻、三〇一～三五四頁。
 荻生徂徠『譯文笠蹄』(正徳四年(一七一四)) 影印版：『荻生徂徠全集』(みすず書房、一九七四年)、第二巻、133。翻刻・今中寛司 奈良本辰也編『荻生徂徠全集』(河出書房、一九七七年)、第五巻、131～136頁。
 同『譯社約』影印『徂徠集』(ベリカン社、一九八五年)、一八六～一八七頁。
 奥村保之編『三浦竹溪口伝』『明律口伝』(写本、序文宝暦二年(一七五二)、早稲田大学図書館 請求記号 704.06258)
 『護國雑話』(写本、早稲田大学図書館 請求記号：イ17.02304)
 清水正健『水戸文籍考』(須原屋書店、一九二二年)
 鳥居久靖『日人編纂中国俗語辞書の若干について』、『天理大学学报』(一九五七年、第八巻、第三号、九九一～一八頁)。
 西島醇『儒林源流』(東洋図書刊行会、一九三四年)
 服部南郭『南郭先生文集』(享保十二年(一七二七)) 延享二年(一七四五) (国立国会図書館 請求記号：149.85)
 森統三 中島理寿編『近世人名録集成』(勉誠社、一九七六～一九七八年)

* 討論要旨

山本嘉孝氏は、視点として徂徠はもちろん大事だが、他の人物たち、特に北溪に注目するということも大事で、これから私たちがみんなやっていかなければと大変刺激を受けた、と感想を述べた。そして以下の2点について質問した。井伯明が誰かわからないことは、はっきりとしているけれども、

岡井黄陵は別な人物としてとらえておくのが安全なのかと思う。黄陵について、護園学派に入門していないと仰っていることの根拠は、何か。そしてもうひとつは、学派という言葉もいろいろ問題はあり、入門しているか、していないかという視点が、重要なのか、というところで、入門という言い方が適しているかわからないものの、人物的な関係をもっていたということは、例に出していただいた服部南郭の日記を見ればわかる。学派とか入門ということは使わずに、このような交流を別の言い方で関係を捉えるところなら、どういう言い方を使われるだろうか。

発表者は次のように回答した。学派とか入門という概念が、たしかにいま私が調べるところによると、はっきりとこれは何派、何派ということは書いている。けれども、当時の人がどう思っているかは本当にはわからない。また、この岡井兄弟の父である人物も調べなければならぬが、色々合致しないところがあり、今日は資料にあげていないが、この人は朱子派と書いている。江村北海も朱子学と唐話学といろいろ取り上げているので、どういう言い方で学派とはっきりわかるのは本当に問題があり、ご指摘の点はもつともだと思ふ。いまは黄陵が入門しているかどうかは、岡井嶮州の方は、護園門人が作った『護園雑話』の最後に、門人として名前があるのに対して、黄陵はたしかではない。けれども、黄陵は、早く亡くなったため、そのせいで名前が入っていないか、他の人と交流が少なかったのかも考えられる。大宰春台と、服部南郭との文集を見れば、岡井兄弟、ふたりとも出るのは、さっきの詩だけであり、本当に黄陵はどういう立場で護園とつながっているのか、いまの時点ではいえないけれども、これからの調査によってわかるかもしれない。黄陵も徂徠と同じ年なので、年のせいもあると思う。そもそも学派といわずにこれらの交流をどのようにいうか、また、どういうふうに影響をうけたか、というのとは本当に大きな問題である。この影響ということばを、どういうふうに言い換えて、もつと建設的に、この人はこういう学歴の背景があつて今のようになった、と明らかにしたい。本当に考えなければならぬ問題である。

